２００４・５中原ぶらり旅の足跡―第一部

鄭州へ

５月１６日から２５日までの１０日間、「中国ぶらり旅」という名を勝手につけたひとり旅をした。

訪れた都市は・・・鄭州・洛陽・西安・蘭州・西寧・西安。主な観光地は崇山・少林寺・龍門石窟・華山・青海湖・白馬寺ほか幾多のお寺だった。

僕がこのコースを自分で企画した最大の目的は、中国大陸の二大河川である長江と黄河を自分の目で、より近くで眺めてみたい、という夢の実現だった。

三年前に《三峡下り》で長江の旅は済ませていたので今回はぜひ黄河を、という思いが強くあったのである。

思い通り鄭州の「黄河風景区」では広大な黄河の砂地をホバークラフトで走り廻り、蘭州では黄河を羊の袋で出来た筏に乗って下る体験も出来た。

・・・・かって都、長安を追放された李白は黄河の印象を次のように書いた。

“わたしは舟にのり黄河に浮かんで都をはなれ、東へやってきた。
さらに帆をあげて進もうと思うのだが、波が高く山を連ねたようである。
天は果てしなく長く、水も果てしなく広いのでさらに遠く旅を続けていくのがいやになった。”・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
“黄河の水は東の海に向かって走り、太陽は西の海に落ちる。
すぎゆく川の水も、流される時間もアッというまであり、人を待ってくれない。
青春の顔たちはわたしを捨てていってしまった。
人生の白髪となりはててしまった”・・・・・・・・・・・・・・李白。

僕が今度の旅の出発点を鄭州にしたのは二つの理由があった。

１つは汽車の長旅をしたかったこと、、はるばるこの地に来た。という気持ちになるには、飛行機ではイヤだったのである。地図を見ると判るけど長沙～鄭州間は北へ一直線なのである。

もうひとつの理由は邱永漢氏の小説「中国の旅、食もまた楽し」の中の「水害の中で育った黄河文明の町鄭州」の文を読んで、鄭州と黄河がひっかかっていたからである。

・・・・・・中国の文化と言えば、中原の文化であり、「中原を制するものは天下を制する》と昔から言われている。中原とは、黄河の流域のことで、ある。

・・・・以下、本文より引用。

中国地図を拡げるとかなり北のほうに位置しているが、商(殷)の時代（約三千五百年前）から北宋にいたるまでの歴代王朝はこの地域にひらかれ、数々の古墳が次々と発掘されるのも大体この地域である。

俗に黄河文明と呼ばれるように、中国の文化が黄河沿線に発生し、開封・鄭州・洛陽・西安と東へ動いたり、西へ動いたりしたのは決して偶然ではない。

そうした史跡が次々と開掘されて出土するのが河南省の鄭州である。

・・・・・今でこそ黄河は鄭州市から北へ３０キロほど離れたところを流れているし、水量もだんだん減ってきたので、しばらくは落着いているが、いつまたどこで大暴れするかわかったものではない。

いつも本の上でばかり接して実物に一度もお目にかかったことのない私としても、一度は鄭州に行ってみなくてはと思った。

《中国の旅、食もまた楽し》より。

二日前の５月１４日の夜１０時１５分、僕は一週間の《九寨溝》の旅から帰ってきた。

成都を夜８時１０分に飛び立ったので、２時間の飛行距離なのに結構疲れていた。

詔山路の華程大酒店に着いたのは１１時を回っていた。

翌１５日(土) は夕方から平和堂の六階にある餐館で益田くんの二代目日本語教師歓迎会が範院長主催で開かれた。

その二日間で《九寨溝》の時の洗濯物を乾かさなければならない。あいにく長沙は雨模様でジーンズが乾きそうもない。１６日からの長旅に間に合わしたいのでホテルに頼んでジーンズだけ乾かしてもらった。

この間のことをぼくの手帳には詳細にメモされている。

●１４日夜：バッグ〈旅用〉整理。電子辞典に電池を入れる。ＤＶは入らなかったらやめる。傘はいれる。ズボンはチノパンにする。ジーンズは乾くか?クリーニングに出せるか?（ホテルで出来るか?●華天旅行社に行く。ホテルだけは三星にしたい。ツアーは現地ツアーに加わりたい。日本人ガイドは不用。

●１５日朝：外は雨、いかにも長沙。昨夜，寮（益田住む）からホテルに戻ったのが夜中の１時、風呂に入って寝たのが２：３０だった。　九寨溝以後、時間が狂ったのか。朝、寮に行く。天気が良ければ益田君が生徒たちと岳麓山に行くというので、一緒に、と思っていたがこの雨ではとても無理。

●李湯竜に電話する。彼に上げた白いウインドブレーカーを今度の旅行中貸して貰おうかと思う。あの九寨溝の寒さはないと思うけど、念のためバッグに入れておきたい。

●このホテル・華程（ファチョン）大酒店はなかなか気に入っている。部屋も、場所も、環境も、サービスも充分だ。満点が五つ星としたら準というところか?一泊２５０元とは安すぎる感じ。でもたまに故障がある。昨夜、風呂の排水蓋がどうやっても開かない。

●１６日朝風呂に入る。９：００　小燕が来る。少し雨。１１：００荷を持って寮へ衣服（洗濯物）を取りに行く。

●１１：００ホテル、チェックアウト。携帯の入金２００元購入。中国銀行の初めてカード機を使って引き出す。小燕に付いてて貰う。

テストに１００元、正式に１０００元、シークｒットナンバーは小燕だけは知っている。二人で黄興路の歩行街にシャツを買いに行く。

●カードを使ってジーンズの上下を買う。小燕にもジーンズをプレゼント。総額、５００元（７５００円）

●４：２０小燕、ぼくを長沙駅まで見送る。彼女の手配で１０元出して、改札前に皆をさしおいてホームに案内される。コレってどうなっているの?「駅員のアルバイトよ。」小燕が言う。いろいろな裏口が中国にはある。●旅行カバンのロックが壊れて開かなくなった。どうしょう。●小燕が言う「アナタ　ムコウイタラ　スグ　ナオシテモライナサイ　ナオタラ　モウ　ロク　ツカワナイデ　イイデショウ」・・・・・・と言って，心配そうに小燕は帰って行った。

小燕（２１歳）は今度の中国滞在中に僕の旅の全ての旅程から交通手段からホテルまですべてを相談に乗ってくれた「長沙華天旅行社」の　僕の担当”尋游小姐（ダオヨウシャウジェ）”だった。

ダオの字が中国簡体字で違うけど、「ガイド嬢」のこと。

彼女の達者な日本語のお陰で旅は楽だと思うけど、頼ってしまって自分一人の孤独感を味わえないので「一緒に行かなくて大丈夫ですか?」との申し出を断った。

《九寨溝》の時も、行く前は「道中、生きた中国語の専属教師付き旅行が出来ると楽しみにしていたが彼女の日本語能力におされてしまい中国人旅行朋友たちとの会話があまり出来なかった。

いざと言うときの電話（手机）連絡だけはいつでもとれるようにして僕は長沙駅５時１０分発鄭州行の硬座寝台列車（ｋ２１５４）に乗った。　翌朝６時３０分に鄭州駅に司机（スージ）注：車の運転手のこと。　が僕の名前を書いた紙を掲げて待っている事になっている。

夜中に突然、僕の携帯が鳴った。

「もしもし!大石さんでいらっしゃいますか?」

久々に聞く正統派日本語である。

「明日朝、鄭州で降りられる大石さんですよね?」

「ハイハイ、そうですが・・・・」

「私、河南大学日本人留学生です。実は、明日、大石さんを案内する事になっている趙福生（ジャオ）さんの同じアパートの隣同士なんですが、彼が大石さんのガイドをとても怖がっています。」

「もし、英語のガイドでよろしかったら、お願い出来ると、言っています。」

「あぁ、別に特別な説明など要りませんよ。それに、僕も、意思の疎通程度は話せますから、手まねなど入れて楽しくやりましょう。と伝えてください。」

「そうですか?彼が言うには、運転ガイドの場合、食事は大石さんが持つこと、各所観光地の入場券は自分の分だけでいいことなど、知っておられるのか?
もし、会社に直接、私への不満を告げられると怖い。・・・そう言ってるんです。」

「お年はおいくつぐらいのかたですか?」

「６０ぐらいです。」

「そうですか?じゃあ同級みたいなものです。ご心配なく」

おかげで、明日の一日のイメージが浮かんできた。

夜は河南大学の留学生も一緒に鄭州の歩行街で食事でも・・・

中原・ぶらり旅の一日目の夜はこうして暮れた。車中での中国人とのコンタクトはほとんどなかった。か、記憶していない。

鄭州の改札口で趙福生（ジャオ）さんがニコニコ顔で僕の名を書いた紙を両手で掲げながら迎えてくれた。

昨夜の電話できっと安心したのだろう。

メモ帳をめくってみたら、１７日の蘭にはこう書いたあった。

支出：

朝ごはん	２人	２０元
入場券		３０元
ホバークラフト		６５元
昼ごはん	２人	２５元
夕ご飯	麦労当	２２元
スーパー(手帳他)		９元

ホテル：聚和賓館

見学：黄河風景区

河南省博物館

商代遺跡

歩行者天国

朝食を終わると趙福生（ジャオ）さんに頼んで、ひとまずホテルへ行ってもらった。

旅用のシェーバーはあるのだが、どうも、あの火車硬座の洗面所で歯を磨いたり、顔を洗う気にならない。トイレにも行きたいので1時間ほど休憩をしたかった。

実は、他の理由もあった。

この前、杭州行きの時買った短期旅行用の滑車つきカバンの暗証ナンバーキーが壊れてしまい、開かなくなってしまったのだ。

赴福生（ジャオ）さんにお願いしてどこかで直してもらうよう昨夜の女子留学生との電話でお願いしてあった。

「ワタシ　鍵屋ニイッテ　ナオシテキマス。」

趙福生（ジャオ）さんは僕をホテルに送るとそう言って出て行った。　1時間ほどして趙福生（ジャオ）さんが帰ってきた。

「先生のイタ（告訴我）バンゴウ、ツオラ（間違いネ）」
いつの間にか、決めていた０１２３が別な暗証番号に変わっていたらしい。
うっかりパスポートでも入れて空港で開かなくなったら大変なので今から鍵はかけないようにした。

それでも時間はまだ１０時前。ホテルから近いという《河南博物館》に行った。とても立派な建物だった。

趙福生（ジャオ）さんが門番としきりにやり合っている。
駐車場のことかと思っていたら、未だ開館しないのだという。あと一時間あとなので先に黄河遊覧区に行くという。

鄭州の道路は直線が多い。滑走路のような道路が延々と続く。
左折や右折すると又延々と続く。そんな感じの街だ。

昼食は鄭州名物を食べたいと、と言うと
「オーケー，マカシテクレ。」と赴福生（ジャオ）さんがニコリ。
市内をグルグルと回る。かなり運転は荒い。
あちこちでのやりとりを聞いてると趙福生（ジャオ）さんの性格は内輪に優しく、他人に強く当たる、よく見かける中国人の性格のようである。

このあと明日の少林寺、明後日の龍門石窟と、今回の旅中、一番長く共に時間を過ごした人だった。
僕のために一度も嫌な顔を見せることなく接してくれた。
もっとも、他の案内人（ガイド）もその点では同じだったけど。

６時ごろにホテルに帰ってきた。３０分ほど休憩をして夕食を兼ねて鄭州随一の繁華街に出かけた。タクシーデ１０分ぐらいのところにあった。

大きな広場があって、その広場を中心に二つのデパート方向と歩行街が続く。上海、杭州、成都、長沙、岳陽と最近は、どの都市にも歩行街があり、その都市の香りを嗅ぐことが出来て愉しい。

街は活気にあふれていたけど長沙や成都ほど明るくなく（ネオンが少ないのか？）商店の照明のせいか？よく分らなかった。

夕食はデパートの１階で麦当労（マイタンラウ）マクドナルドのこと。ですました。

夜おそく小（シャオ）燕から電話が入った。

「ヨシチャン！、キョウハ　タノシカッタ　デスカ？
ワタシ　シンパイシテタヨ　アナタ、手　アラワナイカラ
キタノホウ　非典（サーズ）キオ　ツケタホウガ　イイヨ。」

「大丈夫だよ。ご心配なく・・」

「ソチラノ　ガイドの　コトデ　フマン　アタラ　スグ　デンワ
イイヨ　アタシ　イツデモ　マテルヨ。」

明日は崇山・少林寺です。

東西南北と中央の聖山のそれぞれをつかさどる道教の神。道教での地位は高い。
東岳大帝（泰山）、西岳大帝（華山）、南岳大帝（衡山）、北岳大帝（桓山）、中岳大帝（嵩山）の五帝で、東岳大帝が五岳の首となる。
東岳は**人の命**を、西岳は**金属**を、南岳は**水棲生物**を、北岳は**大河**を、中岳は**土地山川**をそれぞれ司る。

五岳について。

7：30　司机の趙さんと一諸の朝飯を食べ僕は彼のでっかいマイクロ車に乗って少林寺のある嵩山へと向かった。

華天の小燕が作ってくれた日程表によれば、今日の見学地は

道教・中岳廟・・・中国最古の道教廟

嵩陽書院・・・・・古代四大書院の1つ。

少林寺・・・・・演舞庁

塔林・・・・少林寺の歴代和尚の墓地

白馬寺・・・・中国天下第一寺

・・・・・洛陽へ　　・・・とある。

今度の「中原ぶらり旅」は僕としては珍しく事前の旅プラン無しの行動をとることにした。具体的に言うと、今までの旅の場合、行く先々の観光地の詳細を「地球の歩き方」などで、よく調べ、所在地を含め穴場なども、そして、名物や土産品も事前リサーチするのが通常の僕のパターンであった。

今回は何故か?何もしたくなかった。今日の場合も1つのキーワード《少林寺》だけ知ってて、見学し後は鄭州には戻らずにそのまま洛陽に行く。

・・・それだけだったので小燕のいろいろ考えて立ててくれたプランにはあまり関心が無かったのが本音である。・・・というより、中国に来てから、あまりのお寺参りの多さに、いささか食傷していたというのが、本音かもしれない。

ホテルに戻ってから土地の「旅行地図」どこでも大体、5元。これだけは必ず買った。を眺めて足跡をたどった。これも、今までとは逆である。

各スポットの説明は勿論すべて中国語だし、おまけに今説明を受けているところがどんなところなのか?予備知識も無いわけだから、司机の趙さんも、一生懸命説明してても本当は張り合いがないのだが、そこのところは、僕の演技力でカバーした。

言葉の最後の単語をオーバーにリフレインつまり繰り返すのだ。

例えば、年代が分ったとすると、すかさず

「オゥ!!3580年前ですか?」

「オゥ!　サンチェンウーバーニェン　イーチェンマ?」

又は「オゥ!真的?　オゥ　ジェンダ　マ?」

あとは、合間合間に「対　トイ、対了　トイラ」とか、返事を入れればよい。

ときには「明白了馬?」と、くるのでこれは簡単である「明白了!」

司机のジャン(趙)さんは大いにご満足の様子なのである。

又、感心するほど彼はいろいろと詳しかった。ときには本当の正式ガイド(胸に写真入カードをぶら下げている)の説明を聞いてる中国人観光客さえが彼の説明の方に鞍替えしてくるぐらいだったから。

それにしても、《中岳廟》は中国最古の道教寺ということで、面積は37万平方メートルで殿堂や楼閣などを合わすとその数400を越えるというとても立派な廟でした。

中には巨大な、今まで見たことも無い大木がいくつかあった。彼がひときわ熱の入った説明をしてくれたのだが分らなかった。一応、大いに分った振りをして「オーオー　ミンバイラ!!」と、慌ててデジカメを構えシャッターを切った次第。ツライデス!

注：帰ってから本で調べてみたら、この古木は《中岳廟》にあるのではなくて、崇陽書院にあることがわかった。

崇陽書院は宗(960～1279)の時代に作られ、儒教の四大書院のひとつだった(以前は仏教と道教の寺院でもあった)その他の書院は湖南省・長沙市の岳麓書院と江西省にある。

注目すべきは2本の古い柏の木だ。これらの木は紀元前１１０年に嵩山の登った漢の武帝によって、大将軍と二将軍の位を授けられたとされる。
中岳廟はそこから北東、嵩山で最も高い峻極峰に登る途中にあるらしいことがわかった。どうやら我が司机のジャオさんは先に《中岳廟》にのぼりまだ上に行こうとしたら階段の登り口で一人の老夫人に行く手を拒まれたんでした。

「ここから上は工事中で上がれません。」と言われ。
いまここに嵩山・少林寺のマップが無いのでそのとき書き込んだであろう足跡がわからない。

故宮を真似て作られたという峻極殿はとても素晴らしく、変わっていたのは石造りの亀が石碑を背に乗せたのがあり、外国人観光客がパチパチ写真を撮っていたので真似をして写していたら、すかさず、わが司机のジャンさんが傍に来てながいながい呪文が始まった。

「3，$%&.（(，~=)(，&%$####&,）()（$%%#?-?-」

お恥ずかしい事に、疲れてくると、僕の聴能力も初心中国語学習者とかわらなく、呪文に聞こえてくる。
さて、少林寺での昼食は何処で食べたか、説明がしにくい。
　不思議な体験だった。

最初、割りと大きな食堂ホールに行ったけど、そこから別なところに案内された。
西洋人が２０名ほどチェックインしようとしているフロントのようなところの横の小さな入り口を入ったところにある小部屋と言った感じの場所だった。

まさか、ホテルの食堂でもあるまいし、
　それにしても、ここがホテルだとしたら2星クラスだろう。

司机のジャンさんは結構慣れた感じなので初めてではないのだろう。食事はセルフになっているが、客は4，5名、この付近の武術館で修行しているような外国人青年など、セルフといっても、おかずの種類は４種程度、・・・・どうみても、一般客相手の食堂とは思えない。

・・・そんなわけで、ここでの昼食シーンがとても鮮明に残っている。・司机のジャンさんに理由を訊けば分ったのでしょうが・・
この時の僕の脳神経は語学サイトが麻痺していたので訊く気にならなかった。
　もちろん、とてもまずく、ほとんど手をつけずじまいだった。

演舞場での**工夫**（コンフー）は圧巻だった。
　本当はあちこちにある武術館で少年たちの稽古シーンを見学したかったのだがショー化されたのもここでしか見ることが出来ないのでワクワクして約1時間余りを堪能した。

ＶＴＲにしっかり写っていた。もちろん、カメラは膝の上に置いてステージは目でしっかり観ていた。

上海雑技などでクルクル回ったり、身体の間接をはずしたりは観ていたが彼らの工夫は違った迫力のあるものだった。

司机のジャンさんが塔林を出た時に僕に言った。
　「白馬寺は明日の予定になっていますけど、もしよかったら
洛陽（ローヤン）に行く途中なので今日イクドウデスカ?」

うかつにも僕はその名前を今初めて聞いたのである。
「バイ　マー　スー?ゼンモヤン?」白馬寺って何ですか?

彼は小燕から、届いていた「旅程表」を指差しながら

「ココニ、（写）カイテアリマス・・・白バイ馬マー寺スーです。」

・・「当然（ダンラン）可以（カーイー）！」いいすよ！

・・・・白馬寺については、そのような訳で実はよく知らない。案内役のジャンさんも、ここの入場口で案内入場を拒否された。３０元かの入場券が必要とのことで、僕もあまり興味がなかったのと、もう呪文の案内に辟易していたのでジャン氏には「スグ見てきますから、３０分ぐらい、ゆっくりしていてください。」と言って中に入った。

しきりにジャンさんが「第一次ディイーツー」と言うので、何かが一番なのだろうぐらいの感じだったけど、本当は中国で最初に建てられた寺院だそうだ。

インターネットで捜して、どなたかの説明を拝借した。

・・・・・・・・・・

洛陽郊外１５キロの所にあるこの白馬寺は中国で最初に建立された仏教寺院であると言われています。白馬寺は後漢明帝の永平１１年（６８年）天竺から仏典を白馬に積んで来た２人の僧侶を開祖すると言う。山門の両側には、２頭の白馬の石彫があり、境内の東西に、高僧（竺法蘭と攝摩騰）の２人の墓があります。２人の高僧は沢山の経典を持ってやって来ました。

注：実は別な旅行本の説明ではこんなことが書いてありました。

参考に転記してみます。

・・・・・・中国最初の仏教寺院とされる白馬寺（バイマースー）は、洛陽の東１０ｋｍ地点に立つ。この寺の起源についたは興味深い逸話が残っている。

後漢の時代の紀元６４年、明帝が宮殿の前の空を神が舞っている夢を見た。占い師に夢の解釈を尋ねたところ、それは仏陀に違いないという答えが返ってきた。

そこで帝は二人の僧侶をインドに送り、仏教の経典を持ち帰るよう命じた。数年後、二人は二頭の白い馬に乗り，経を抱えて戻ってきた。

これが中国に初めてもたらされた仏教経典であるとされる。

経典を保管する為に寺院が建てられ、２頭の馬にちなんで白馬寺と名づけられたというのである。

現在残っているのは後世に建てられたものだが、寺院には１世紀まで遡る事の出来る歴史の記録が残っている。内部には二つの墓があり二人のアフガン僧が永遠の眠りについている。・・・・・

白馬寺と言う寺名については諸説あり、正確には解らないようである。地名説。白馬が佛典を乗せて来たので、それにちなんだ命名とかいろいろあるようだ。

洛陽に白馬寺が建立された後、各地にも同名の寺が造られたと言うことである。長安にも建康（南京）にも白馬寺と称する寺があったそうだ。

現在の白馬寺は明の嘉靖年間（１５２２－１５６６）に大修復され、清代にも１度、解放後の（１９６１年）にもあったようである。

本堂には（経幢）円形の石柱に佛号・経文を刻んだものと、元代の碑刻は共に芸術性が高いと言われている。境内には天王殿・大仏殿・大雄殿と言った伝統的な四合院形式による建物が歴史を感じさせてくれる。

大雄殿の東西に元代に彫られた１８羅漢像があり、白馬寺観光の中心的なスポットと感じた。

東側に金代の大定１５年（１１７５）建立の斎雲塔と言う石塔が建つている。四角１３層、高さ２４メートルでこの寺院のシンボル。馬寺鐘声・『洛陽八景』の一つ。明朝・嘉靖３４年（１５５５）の鋳造で重さ２，５トン。

面白いことに、この鐘の音にこたえて洛陽東門にある鐘も共鳴すると言う。二つの鐘の周波数が同じなので、こういう現象が起きるそうでである。ここでは「馬寺の鐘音、西にこだます」と言われている。

丁寧な説明に感謝！！

白馬寺の見学は久々に説明役に気を遣わなくて（はっきり言うと演技をしなくていいのと）寺院が古い割には綺麗に維持されているのと、これは、何と言ってもいいのは、階段があまりない、全体が平地で公園のような感じがしたりで、とても快適な?お寺だった。

さて、メモに書かれていた今日の経費(入場料)は・・・

少林寺入園料	１５０元
とても高いと思いました。	
食事(昼)	４０元
とても高いと思いました。	
土産に買ったTシャツ（５枚）	１６０元
骨筋肉痛用薬	１００元
達磨和尚の写し絵（松間さんに）	２０元

洛陽までの道路はほとんど高速を通ったような気がする。高速の出口で３０分ほどのハプニングが発生。高速の料金支払い所で一台の小型トラックが出れずにいる。

小柄な男が何やら紙切れを振りかざしながらわめいている。中からは、それを否定するような返事。

とうとうトラックを降りて詰め寄る男。

助手席から彼の奥さんらしい人も降りてきて、二人で抗議。

相手にしない事務所側。

２０分ぐらい、クラクションを鳴らし続ける我が司机のジャオさん。

だんだんエスカレートして行く喧嘩。

司机のジャオさんがとうとう車から降りて行き怒鳴り始めました。

「なにやってるのか知らんがあんたら、ここでやりあわんで横のほうでやったらどうや！車がよけいならんどるのがわからんか！！このアホども！」

今度は、トラック男と司机のジャオさんの言い合い。が始まる。　とまあ、喧嘩の場合は中国語も、カタカナ日本語も合わない。

何故か?関西弁・・・・・・・・・・・。

３０分ぐらいしてやっとハプニングは終わった。

まだ日の高い４時過ぎには洛陽の街に入ってきた。

洛陽のことについては次の洛陽（ローヤン）編で書くとしてここらで少し小休止《休息休息！点点》。

＊旅も何日か続けているとホテルでの少々のトラブル（不都合な点は余り、気にならなくなってくる。たとえば、ＴＶが点かなかったりすると諦めて観ない（観たくて点けるのではないので）。お湯のポットが故障していたらミネラルウォーターの「アハハ「」で間に合わしてしまう。

お風呂のお湯にしても出さえすれば少々ぬるかろうと、湯量が少なかろうと、おかまいなし。

暖かい季節のせいもあると思うけど、不思議なもので、浴槽のないシャワーだけのホテルを続けて経験してしまうと、たまに浴槽があっても、何だか湯を貯めて入るのが気持ちが悪くなってくるから不思議なものだ。

上海や長沙市の三星ホテル（四星に近い）だと連泊すると、ベッドシーツなどを新しく変えてくれるけど、地方都市の三ツ星クラスになるときれいに掃除はしてくれてもシーツや洗面用具もそのままというところが結構多い。

たいていのホテルはベッドサイドに電灯のスイッチがセットされているがそのす

べてのスイッチが１００％機能しているところはなかった。もっとも、全部のスイッチをわざわざチェックするような客も珍しいと思うけど。

どこかのホテルで浴室のなかにインターネット接続端子（電話線）が説明つきで付いていたのにはビックリした。

一人で三ツ星ホテルに泊っているとたいてい按摩・足マッサージの誘いの電話が入る。いや、二人でも同性同志だとかかってくるのかもしれないが。慣れないと注意が必要だ。言葉が通じないのでアンモアという言葉だけで、「ハイ、ハイ」と言ってしまうと、数分後、ドアｆがノックされ、開けると、そこに立っている怪しげな小姐の怪しげな微笑に一瞬！「あれーっ！！」・・・と、いうことになる。

それはそうと、昨夜頼んだ按摩（正真正銘の）小姐はうるさかった。年は１８歳，名前は李とか言ってた。ホテル内の美容室からの出張とか、とにかくよく喋りまくる。次から次へとローヤン弁ではなしかけてくるので按摩の気持ちよさに浸っておれない。

おまけに力が弱い。お前、本当に、「アンモア小姐？？」と言いたくなる。１時間６０元が勿体ない。

市井の中国人と話す機会の少なかった頃は《生きた中国語会話編》とばかりに、いろいろ話をし、ときには、按摩中にメモをとりだし、漢字で筆談をしあった頃がなつかしい。

明日は朝、７時に司机のジャオさんが迎えに来る。

明日は龍門石窟と洛陽博物館それに関羽の首塚のある関林堂を観光することになっている。

龍門石窟

大同の雲崗石窟・敦煌の莫高窟と並ぶ中国三大石窟のひとつ。

北魏の孝文帝の洛陽遷都にあたる４９４年に開始され、唐代までの約４００年間にわたって続けられた。現存する石窟は計１３５２ヶ所。全長は１ｋｍに及ぶ。唐代末までに彫られた仏像は１０万体。多くの石窟は西側河岸にあるが、北魏時代の石窟は入り口付近の３洞をはじめとする１４窟で、その他は唐代のものである。

ほぼ中央上ぶにある奉先寺洞は、龍門石窟を代表する石窟で、唐の最盛期に造られた。

中央に高さ１７ｍの盧舎那仏の坐像があるが、モデルは則天武后といわれている。

・・・・洛陽というのは、宗において衰微するまでは，大した町であった。唐代では、首都が長安であったとはいえ、なお、副首都の位置をたもっていたとされる。

唐の長安は世界都市として当時、遠く西方まで光芒を放っていたが、その後背地である「関中」は秦漢時代ほどの農業生産力を持たなくなり（長安の消費人口が大きすぎるため）食料その他の物資は洛陽にあおがざるをえなかった。

このため洛陽が副首都とされ、長安なみとまではゆかなくても相当な規模の宮殿や官衙（ギョ）がそなえられていた。

皇帝でさえ長安で食糧不足になると、めしを食うために（ごく具体的な意味で）洛陽まで出てきて長期滞在した。

百官を連れて来た。当然後宮の女どももきた。みな洛陽で、数万人の支配階級とその寄生者たちが、箸をうごかしてめしを食った。

玄宗皇帝などは洛陽にやってきてめしを食う事がしばしばで、それより前、盛唐のころの高宗などは、在位三十三年のうち十一年もこの洛陽で暮らしたと言う。

江南の穀倉地帯から大運河などの水路をへて食料が洛陽まで運ばれてくる。洛陽から長安への輸送は険阻な陸路が多く、難渋をきわめた。

その輸送を待つより、いっそ口を洛陽に持って行って食物を食うほうがてっとり

ばやく、そう言う発想で洛陽への行幸が営まれた。

　九世紀には、日本僧の空海も円仁もこの町を通った。

／・・・・・・・・・・・・・・・・・・長安から北京へ

　　　　司馬遼太郎（中公文庫）

洛陽は今度の旅で唯一街を歩きたいと思った都市である。そういった意味では町々が観光地としての位置づけであった。

　京都が西安（長安）なら奈良が洛陽といった感じで洛陽を想像していた。だから、小燕との打ち合わせの時から、洛陽は一日市内をブラブラと歩き回りたいから、２泊にしてね。と頼んだ。

　だから、昨日、ジャオさんの車で洛陽入りをした時はとても胸がドキドキしていたものだ。５年前、初めて西安の城内に空港バスで入ってきた時と同じ高揚があった。

　しかし、車中から眺める街の風景は余りパッとしない。

高層ビルの林立する整然とした都市というわけでもない、といって木々の緑で覆われた静かな古都といった感じもしない。

　なんの特徴もない中国の中都市？僕の思い入れ強い洛陽は街の香りを捨ててしまったような印象がした。

　成都や鄭州の市街地中心の華やかさを見てきたばかりのせいもあると思うけど、その夜、出かけた洛陽の歩行街（ブシンジェ）のうらびれた暗い光景が頭から離れない。

　敦煌の莫高窟を見ていたのと仏像にさほど強い関心がないせいか龍門石窟への期待感はさほど強くはなかったけど、あの川沿いに延々と続く仏像石窟を眺めた時はさすがに「ホーッ」と感嘆の声をあげた。

　もっとも、又入り口（切符切り）で我がジャオ氏と係り官の激しいバトルがあり、とうとうジャオさんが負けて、ぼくが切符代２００元ぐらいを払うはめになった。
その間のトラブルタイム３０分の後だっただけに、ホッとした後の感動だったのかもしれない。

　さすがに有名観光地なので観光客の数は相当のものだった。ほとんどが中国人だ
西欧人も結構めだったけどわが日本人はたぶん団体としてはいなかったと思う。
日本人観光団と遭遇したのは結局、あの九寨溝でだけだった。

石窟群は左の画像で雰囲気を感じていただければ嬉しい。
大体、時間の経緯に合わせて配置した。

　僕たち二人は橋を渡って反対側（東山）から石窟をながめたり、またまた長い石階段を上がる（香山寺）をめざした。

旅の間中、ぼくは何度思ったことだろう。
　「もう、山の上にある寺には登るのをよそう。」と

この香山寺の階段はとりわけ堪えた。

どこやらの学生たちと一緒だった。可愛い女の子たちがたくさん一緒だったので何とか上まで上がることが出来たがジャオさんと二人きりだったら，やめてたかもしれない。

　しばらく行くと白楽天（白居易）の墓がある公園を訪れた。

洛陽への帰りに関林へ立ち寄った。

曹操が敵側になる関羽に敬意を表して建てたという関林は
プランの段階からぼくが小燕子に頼んでコースに組んでもらったところだった。
もう少しさびしい処かと思っていたら、ここは経済（金儲け）の神様なんだそうで、中国全土から金持ちになりたい人たちが訪れるんだそうだ。
一番奥にある**関羽の墓**（まんじゅうのように大きな円の中にある）に行ってみた。
成都にある劉備の墓も大きかったけれど、ここの墓は三倍は確実に大きいと思った。
帰りの車中でぼくは言った。
「明日はボクひとりで洛陽博物館やら市内見物でもして
午後の汽車で蘭州に行きますから、ジャオさんはボクを
ホテルまで送ったら鄭州へお帰り下さい。」・・・・と。
「メガンシー　メイガンシー。ハイヨードーシージェン。
ウォ　ダイニー　ボーウーグアン　クオイー」
注：大丈夫ですよ、まだ時間が一杯ありますから
ボクが案内します。」
ということで、ホテルに帰らずに洛陽博物館に行くことにした。
余り期待もしていなかった博物館だったけどこれがとても内容の濃い博物館だった。
古いせいか、そういう意味では洛陽の市街地の雰囲気と似ている。豪華な、ゆとりのある内部ではなかったけれど、人も少なくゆっくり見学できた。あとで、ここの陶器・唐三彩は有名だと知ったのだけど、確かに圧巻だった。
カメラを車の中に置いてきたのが残念だった。
またジャオさんがなにかしきりにすすめてくれる。
「シンダボーユグアン　マーチャーダ　・・・・・・・シンブシン
ニーミンバイラマ？」
何やら新しい博物館を見に行かないか？と言ってるらしい。」
ボクが分らないのか、今度はメモ紙に２０元とか、馬とか、
書くので
「オーケーオーケー、可以（クァイー）」
あぁ　いいですよ」というと、ニャリと笑って走り出した。
連れて行かれたところは洛陽の中心街にある広場（グアンジャン）である。そういえば広場の真ん中に工事の後がありクレーンがあり、大きなテントが張ってある。
そして、馬の像があったように思う。
駐車場をみつけ車を降りた。
地下に降りていくと階段の途中で又料金所がある。あぁ、ここが新しい博物館で２０元の入場料が要るというわけか？
何とそこは、３年ほど前に、ここに大きなスーパーを作ろうと工事を始めたら底から馬の骨や荷車がいっぱい出てきたらしい。
調査してみると、なんと紀元前７００年から２００年のころの周の時代というからあの西安で発掘された秦の始皇帝の兵馬ヨウより以前である。
今年２００４年の４月というからごく最近にこの現場をそのまま博物館名にした

とのことで、真新しいパンフレットを貰ったのだが残念な事にボクが帰ってから送ってもらうことになっている郵送品箱に入れたままで今此処に無いのでそのパンフレットに書かれた新博物館名がわからない。
送って来次第、ここに書き込むつもりである。

それまでは馬荷車博物館みたいな仮名が付いていて、人々もその呼び名で呼んでいたらしい。

それは暗い地の底に、眼下にそのままの形で、綺麗に土を払い落とした馬の骨と、荷車の列が連なっている。

２０００年前の馬のいななきが聞こえてきそうな感動的な現場がライトで照らされていた。

写真撮影が禁止されていたので現場をお見せ出来ないのが残念だけど、そのパンフレットには現場写真が載っているので、ボクの許に郵便箱が届いたらコピーしてお見せできると思う。
６月２５日に最後の荷が中国から届きました。上に書いたパンフレットのコピーを早速、写真の最後に掲載します。
上の原稿の博物館名も分りました。

以前２００３年１０月１日　周王城車馬杭博物館　開館
２００４年初　上更名『洛陽周王城“天子駕六”博物館

２０日の日記

今日、行く予定の博物館を昨日済ませてしまったので今日は昼過ぎまでホテルでゆっくり過ごすことにした。

ジャオさんは今日の蘭州行きのことについて何度も僕に念をおして、昨夜、６時ごろホテルにボクを送ったあと、ニコニコ笑顔で、名残惜しそうに?手を振りながら鄭州に帰って行った。

奥さんにおみやげでもと５０元札を一枚手渡した。　あとで、「何てケチなことをしたのだろう。１００元渡せばよかった。」と反省したが、この頃、ボクも、１００元～１，５００円という日本変換レートを忘れてしまいかかっているようだ。

日本式に考えたら２００元ぐらいお礼に渡しても多すぎはしないのだが。

午前中はホテルでいろいろと書き物をしたりして１時３０分のチェックアウトまで過ごすことにした。
なにしろ暑い、こちらに来て天候に恵まれる過ぎているのか
これが５月の天気で、長沙が異常なのか?
多分、後者だと思う。
ふと、牡丹公園にでも行ってみようか?と思ったけど日射病にでもなったら元も子もない。

それにしても、昨日の東関（もしかしたら、この名称、正しいかもしれない。メモにあったから・・・）新公園はびっくりした。
すばらしい観光地が洛陽に出現した。

日本の観光社も新しいコースの設定をしてもいいのではないだろうか?

１１：４５頃：

突然、携帯が鳴った。長沙の小燕か?それとも、シャケンか?それとも上海の李黎か
ウルムチの馬さんか?と思って電話に出ると、はるばる熊本の八期友達・上田平

加寿子さんのなつかしい声が飛び込んできた。
「オイシサン!今、何処にイルノ?」
それからしばらく熊本〜洛陽間の国際電話は続いた。
「アタシ、インタネットの回線で電話してるから電話料ただみたい。気にしなくていいのよ。」
いつもの彼女のあかるい顔を思い浮かべながら、ぼくも、こちらの様子をこまかく話す。彼女は僕のからのメールやHPで結構、僕の行動を知っていてくれて嬉しかった。
「わたしもこのごろ中国に興味を持ち始めたのよ。」のコトバは嬉しかった。
電話を切ってほどなく、昨日のジャオさんから電話がきた。
「蘭州に着いたら電話をくれ。」という。
もう、彼の役目は終わったはずなのに。」
心配してくれてるらしい。例によって、なにを言っているのか早口の中国語はわからない。最後に例によって
「明白了馬?」ときたので
「対了!明白了。」と、合言葉で答えると、日本語で
「サヨナラ」とヨにアクセントをおく独特のコトバで電話を切った。
ほどなく、フロントから電話が入った。
「火車票（汽車の切符）を渡しに部屋に行く」と言う。
ジャオさんが僕に切符を持っていくようフロントに言ったのだろう。
駅は近いからタクシーは使わなくていい。とホテルの服務員は言う。これも、ジャオさんがホテル側に申し伝えていたのだろう。
実は昨夜、今日の駅までの行程を体験してみようと歩いてみたら結構遠いし、旅行カバンを引っ張っていく事を思えば
わずか5元（洛陽のタクシーはとても安い）何も節約するほどの額でもないのでタクシーで駅まで行く事に決めていた。
その後に起こった 洛陽駅での出来事。 を知りたい人は、ここをクリックしてください。

次は蘭州です。

蘭州へ
「ぶらり旅」で利用した寝台列車は6回ほどあったと思う。 蘭州へ行く時は下段ベッドだった。
下段は頭のそばにテーブルがあってその下にはポットが置いてり、皆が利用するので中段や上段のように早くから横になることが出来ないから嫌いだった。
案の定、一組の夫婦が遅くから食事を始めた。何か、とても匂いの強い（あまり好きでない）おかずを食べている。
食後は奥さんの方は上段にさっさと上がったけど、男の方は友達が替わりにやって来て二人でビールを飲み始めた。
ぼくの頭が来るであろう位置に男のお尻がきてる。 とても嫌な感じである。下段ベッドの嫌いな典型的ケースである。
そういえば、書かなかったように思うが、旅のはじまりである長沙から鄭州行きの寝台は中段だった。
上段とばかり思い込んでいた。鄭州の日本人女子留学生からの長い電話の後だった

思う。

夜中にトイレに立って帰ってきた。車内は真っ暗だった。ぼくは上段とばかり思い込んでいたので、目ぼしい位地で上段に上がろうと手をやったら人の足に手が当たった。（一瞬、ビクッとした。）

列を間違えたと思い次のベッドに行くとそのベッドは見ただけで膨らんでいた。

今度は一つ手前の列の上段を下からそっとふとんを開けてみたら、又足があった。目ぼしい場所を４回ぐらい往復したが全部人が寝ている。　　パニック状態になった。

初めの場所に戻ってくると中段（そこはぼくの向かいになるベッド）の男が大声でわめいている、おそらく

「お前のベッドはここじゃないか！何を寝ぼけているんだ！」

とでも言ってるのだろう。そのうち、車掌までやって来て

「切符を見せろ」と言う。中国の寝台列車は何故か?汽車に乗ってから切符と金属のチップ（犬の首につける検札片のようなもの）に変えて、汽車がつく頃元の切符と交換する。

目の前に自分の寝ていた中段ベッドが主を待って空いているではないか。

あたまを掻き掻き、「スミマセン、ネボケテマシタ」を連発して事なきを得た。ひとつ間違うと、とんでもない大事件になりかねないところだった。

《鳳凰》へ行く時に乗った硬寝台車は素晴らしかった。二階建て寝台で、下段に上下二段ベッドがあり、上段に同じく二段ある。幅もひろくて何もかもが新しい。

それに較べこの列車のひどさはどうだろう。相客との会話の夢も消え、ＩＣレコーダーでのシャケンや小燕や学院の生徒たちとの会話復習に励むことにした。

蘭州の駅には早朝の６時過ぎに着いた。

小燕から「蘭州の案内は女性ですヨ。タノシミネ。」と言われていたのでチョット愉しみにしていた。

でもぼくを迎えてくれたのは小太り（遠慮して言って）の女性、でも、ニコニコとても愛想がよさそう。力もありそう。

ガイドはどこでも親切で、よく気がつく、おまけに力持ち、中国語でダオヨゥとよぶ。漢字は**導游**と書く。ダオの字は簡体字である。

案内してくれるクルマは黒のアウディの乗用車だ。運転手も女性でダオヨウに負けないくらいの体格をしている。

二人とも３０代半ばといった感じである。もうひとつ、二人に共通した特徴はとても髪が短いことだ。もう、ベリーショートなのである。

運転手の方は後ろから（前からも大差ないが）みるとほぼ男性化している。気分も、二人の会話も、聞いてると男っぽい。イエイエ、決して嫌な印象は受けない。むしろ、その逆と言っていい。

夕方には西寧に向かう（火車で）ので蘭州のコースは忙しい。ぼくは蘭州での観光についてもお恥ずかしいが知っていなかった。本当にどうしたことなんだろう。

旅程表も貰っているし、分厚い「地球の歩き方・中国」も持っているのに。

あまり旅の連続で観光地めぐりの意識がなくなったのか、でも、ただひとつのキーワード、黄河をまたぐ第一番目の橋がここにある。

その橋の上から黄河を眺めてみたい。それと、もし、実現するなら、何らかの方法で河の上を舟で流れてみたい。ということだけだった。結論から言うと、すべて、実現した。

ただ、有名な第一橋だけは今、補修工事中で渡れなかった。なにやら、橋の高さを変えるのらしい、８月には完成するとのことだった。

最初に向かったのは「白塔寺」で、ここも、予定の上り口が工事中とかで、くねくねした裏の山道を、分かれ道になると、誰かに訊きながら頂上に着いた。

また、二人に案内されながらいくつかの寺を覗きながら降りた。

イスラムの寺もあり、この山も霊山なんだろう。蘭州の市民の憩いの山だと言っていた。ながい歴史のある山寺というのはよく分った。

二人の早口の中国語の解説はよく分らなかったけど、分った振りの演技は前よりさらに上達していった。

山を下がりながらお寺を訪ねるというのはとても快適だった。

蘭州の街は川沿いに沿って綺麗な道路が一直線に続いている。次に向かったのは黄河の河川敷きに降りて、魚かエビを捕っているところを見学に行った。

これは多分、観光のコースではなかったのだろう。

橋を渡ってぼくらはUターンした。なにやら水車が見えるところに来た。コース表に+++水車と書いてあったので予定のコースなのだろう。

河近くにモーターボートやゴムボートみたいなのがあった。たぶん、黄河で遊ぶ船に違いない。

すると、ダオヨゥが　「イカダ　ニ　ノッテ　ミナイカ?」と、言った。よく見ると黄色い皮袋がたくさん板に付いている。何時かどこかのテレビでこの皮袋（一匹の羊を殺して、腹の中を空っぽにして、中に空気を入れて紐で結んでしまうのを見たことがある。

よし、これに乗ろう。と決心した。鄭州で黄河の河川敷をゴムの水中翼船で走るよりはるかに愉しい体験だった。５０元で一生の思い出を作ることが出来た。

ＤＶムービーをまわしながらのイカダ乗りだったのでバランスに苦労したけど後で見てみるとなかなか良く写っていたので嬉しかった。

やはり女性はいい。何の話だと思いますか?

ガイドの話です。もちろん、ミャオティャオなピャオレンは鑑賞としての心身の後のほうの脳神経を刺激してくれますが、それなり女性は前の方の神経に心地よく反応してくれます。

蘭州の二人のサポーターはその意味ではとても心地よい同伴者でした。

よくしゃべりまくり、よく笑い（かなりの豪傑笑い）、よく、クルマから外とケンカ（に中国では聞こえる）をする。

二人して（とても仲の良い友人同士らしい）漫才をしてるようで、僕を巻き込んでしまう。

コトバはまさに方言も混じっているので昨日のジャオよりまだ理解できないのに

なんとなく身体で分るから不思議。

２人とも主婦でこどもがいるらしい。

運転席と助手席で交互に僕に向かって孫娘の話を聞きたがる。２人とも小学校の高学年らしい。

全寮制だという。そして、子供に対する期待感?思い入れ?そんなものは中国人の親たちはかなりのものである。

子供に対する考え方、というより中国人の家庭・家族観はいろいろ考えさせられる事が多い。家族の絆の強さを感じる。

親は子供に対して教育の為には金を惜しまない。しかし、貧乏でその惜しみたくない金がない家庭が多い。

親の気持ちがよく分る子供たちは、自分は大きくなったら絶対お金持ちになって今度は親を幸にしたいと考える。

僕の教えた日語学校の生徒たちの《将来の夢》という作文に、ほとんどの生徒が「大きくなったらお金持ちになりたい」と書いている。

そういうパワーが今の中国の発展の原動力になっているのかも知れない。

デモ、書いている生徒の多くが「・・・・と思っていましたが、今は少し違います。お金より大事なものは何か?

お金持ちの悪行?に対する批判的な考え方も書かれていたのを思い出す。

（注：「ケイジの長沙日記」

http://www.nihao-kagoshima.jp を参照。　）

ところで、蘭州での１日ツアーは左の写真が時間の経緯と同じにしてあります。（静止画を除く）

お昼は何を食べたいか?と聞かれたので、羊の専門料理でも食べたいですネ。と答えると、「ヨシヨシ、お任せ下さい」と言い、又３０分ぐらい車を郊外に、と言っても黄河沿いに走らせて左写真の店に連れて行ってくれた。

まだ時間があるといって、ガイドさんは蘭州一のデパートを案内する.と言い連れて行ってくれたが余り見たくもないので、それでも3階ぐらいまでは興味ありそうな顔をして眺めまわしたけどその上についてはお断りしてデパートを出た。

・・・・・３：００

蘭州の待合室から改札が始まった。

電光板もなく、ただ中国語による構内放送だけである。もっとも聞いてる乗客たちの動きでほとんどは判るのだけど言葉の理解はむづかしい。

司机の劉さんが一緒にホームまでぼくの荷をひっぱってくれた。

切符に**０２下５号**と書かれていた**下**とはなんだろうと思っていたら、何とその火車は二階建て列車だったのだ。

結局、彼女はぼくを列車の中まで荷を持って付いてきてくれ、なんと!横に座ったカップルの中国人に

「他去西寧、他是日本人、到時候　ヨロシクネ」

とお願いまでしてくれた。

そして、ホームに降りて汽車が動き出すまで見送ってくれた。

今回の旅は司机やガイドに恵まれたけど車中の相客とはあまりコミニュケーションがなかったのが残念だった。

よく、旅の体験談で聞く

《中国人は好奇心にあふれた人種だから、何でも聞いてくる》

と聞いていたけど、だんだんそれも**昔は**・・・と言うことになるのかもしれない。

司机から、ぼくの事を頼まれたカップルも、列車が西寧に着いたら僕に目で合図をしてくれたし、ホームに降りてからも、改札口に行くまで目を配ってくれた。

もしかしたら、ぼくがだまっていたから向こうも話しかけてこなかったのかも知れない。

次は青海湖に行きます

西寧は・・・・

チベットのラサへ向かう陸路の玄関口という。チベット族や回族など多くの民族が行き交う街である。昨夜、ガイドの袁クンと屋台を回ったけど、本当に多くの民族が混じりあっているのを実感した。

もっとも、ぼくもハンゴレン（朝鮮人）に間違われたけど、日本語と韓国語の違いなど判るはずがないのだから、顔だって同じに見えるのだろう。

ダライラマ１４世もこの近くの出身だという**タール寺**は西寧を南へ２６ｋｍ行ったところにある。

チベット仏教黄帽派の六大寺院の一つで、１４世紀に生まれた黄帽派の創始者、ツオンカパ生誕の地として信者の敬意を集めている。敷地内には大金瓦堂、八宝如意塔、バター彫刻の立ち並ぶ回廊などがある。

とくにバター彫刻の仏像にはびっくりした。袁クンの説明で分かったのだが、堂内にある仏像群は、すべてガラスのケースに収められている。

バターが外の熱（気温）で溶けないようにと、サーモスタットで管理しているのだそうだ。

「電気ガ故障したらミナ　トケテシマイマス。」

ぼくは何処に装置があるのか、と、ケースの隅々を捜したけれどとうとう見つけることは出来なかった。

仏像が解けた時の様子を想像してみたりとても興味深いところだった。

供えの場所には必ず小さなボール状の黄油（ホワンユ）バターのこと：があったけど、彼の説明を理解する事は出来なかった。

タール寺はとても興味深いお寺だった。他の中国寺（道教、禅寺も含めて）と一番違ってたのは仏僧たちの存在である。

とにかくその数が多いのである。いたるところ僧たちがいる。考えてみるとお寺に僧がいるのは当たり前なのかも知れない。

他の寺（日本の寺もそうなのだが）で修行僧をあまり見ないのは観光客の目の届かない場所が寺のなかに別にあるのだろうか。そういえば、寺内のそこここに、《請不進入旅遊客》と書いた立看板を見たことがある。

興味深いシーンが多いので記録して皆に紹介できればと思い、
「写真を撮ってもいいのかナ?」
とガイドの袁クンに尋ねたら、あまりハッキリした返事を貰えなかったので遠慮した。

昨夜は小燕子から珍しく長い手机（携帯）メールが届いた。

彼女からのメールはふだんはローマ字での日本文で交信することにしている。ほとんど用件だけの短文である。

多分、察するに、今日で彼女が僕のために作ってくれた旅行日程が終わったので、その意味もあってのメールなのだろう。

午後には西安に向けて飛び立つことになっている。

西安での４日間は知り合いの陳さんご夫妻との再会や一日か二日、念願だった《華山》の旅遊などは当地に行ってからの情況次第と思って、長沙への帰り日も未定にしていた。

・・・・・小燕からのメールの一部です。

今度の旅行はどうですか?私家にいた、ズット雨でした。なんにもできなかった、　貴方を思う時、心の痛みを感じられ･貴方を見る時、幸せだと思い；貴方と知り合うのは、縁であり；無消息の時、寂しい気がする。片思小燕子。

ぼくにとってタール寺での体験はとても思い出深いものだった。

帰りに立ち寄ったチベットグッズも今までの他の寺院などにあるみやげ物とは違い、買い気をそそるものが多くあり、しかも安いのでまとめ買いをしてしまった。骨董品はほとんど偽物に違いないと思い控えたけど。

でも、ここで購入したほとんどのグッズは、お別れ教室のとき、我が愛する生徒たちに配ってしまった。

ところで、西寧では、タール寺のあと、山肌にくっついたような、きつい階段を上がり、**道教の寺院・北禅寺**に行った。あまりのきつさにぼくは、
「もうお寺は結構です。」　と言って、これから上は工事中だから策道（ロープウェイ）で行きますか?との袁クンの問いをさえぎり、山を下りた。

彼の話によると、このあと空港に行く前に、もう一ヶ所寺院に立ち寄る事になっている。と言う。
「よしてくれぇ!」と言いたい。小燕は自分がお寺好きなせいか、ぼくの旅程に、いくつ寺参りを入れたのだろうか?

「先生、だいじょうぶ、今度行く寺、ゼンゼン　キツクアリマセン」
と袁クンが言う。

清真寺は明代の創建で、緑と黄色のあざやかなイスラム寺院である。中庭では白い帽子を被った信者たちが、そこ、ここの椅子に腰掛けて熱心に教典を勉強していた。

大きな中庭のセンターに一本の線（幅１ｍぐらい）が引いてあり歩行路と書いてあった。

何も、わざわざこのひろい庭の中の細い線の上を歩く事も無かろうに、と思いながら本堂に行った。立ち入り禁止と書いてあり、覗いただけで来た道を引き返してきた。

結局、大したこともなく空港まで行く時間を引いても、まだ時間が余る。暑いので、入り口付近の石の上に座って時間つぶしをすることにした。

袁クンが言った。
「この寺院は毎週金曜日がお祈りの日なんです。祈りの時間が近づくと、５００人以上の信者さんが集まり、お祈りします。」
と、それで「歩行路」の意味が分かった。歩行路以外の場所は信者が座る場所だったのである。

実はここで、余り知らせたくないことを書かねばならない。
いろいろ考えたのだが、旅の心得のひとつとして・・・・・・。

ここの石段で休憩している時の事です。
ガイドの袁クンに運転手がなにやら難しそうな話をしている。
しばらく、ふたりで話をしたあと、袁クンがおもむろにぼくに話してきた。

「先生、実は今日のごガイド料を１００元、これから空港まで送っていく車代として１００元，計２００元もらえないか?」
と言うのである。
実は彼との話の中で、ぼくが
「空港まではタクシーで時間と料金は幾らぐらいか?」
と、聞いたら、タクシーなら１００元ぐらいです。との会話を思い出した。同じ料金なら、彼等の送って貰ってもいいか?
しかし待てよ。《いままで、ガイド料は払ったことないゾ、》
連中、悪巧みをしているな、と思ったのでぼくはこう答えた。

「そう、でも、今までガイド料は払った事はないよ。ツアー費に入っているのじゃないのですか?」
「会社からそうは聞いていない」と彼は言う。

・・・・本格的な中国語のやりとりが続く、今までは分かろうが分かるまいが、「**対了**。」分かりました。「**明白了**」了解しました。と答えて、済ませてきたが今度はそうはいかない。

考えてみれば袁クンには昨夜も3時間ぐらい僕に屋台を案内してくれ、世話になっているし、日本円にして1，５００円ぐらいの付合料は払ってもいいかな、という気がしたのも事実だが、

「そうですか、言うとおり払いましょう。でも、帰ってから長沙市の旅行社に報告したいので今から貴方の旅行社に寄って《受け取り領収書》を書いて印を押してくれ」と袁くんに言った。

二人のまた長いヒソヒソ話が続いた。袁クンが口を開いた。
「ガイド料は要らない」送り代だけでいいと言う。
解ればいいことで、ぼくは金が惜しいのではなく、騙す行為を許せないだけのこと、袁クンに言った。

「先ほど渡した２００元は返さなくていいよ、１００元は君へのぼくからの小意思（シャオイース）だ。」
二人はまた、こそこそ話をはじめたが結論が出たのか、
「先生、申しわけないが、１００元あげるのは先生の零銭（リンチェン）つまり、チップだという意味のことを紙に書いてくれないか」
と言う。なかなかしたたかな感じである。
ハハーン、この運転手が首謀格なんだ、と思った。

とりあえず１００元は返してももらい時間も来たので空港へ向かった。ぼくは後部座席から、この顛末を小燕に電話した。

「ウェイ!ニハオ、小燕!
昨天晩上我収到信・・・謝謝、号外、我現在座車・・・・・・・・
実は、ここ西寧の導遊ガイドがこう言っているが・・・・」
「アンタ　イクラ　ハラタ?払ワナクテイイヨ　アタシ　ソチノ
リヨコウシャ　デワスル。」
と言って切った。ほどなく運転手の携帯が鳴った。運転手から携帯がガイドの袁クンに渡され、結構、長い会話が交わされていた。ぼくにはもう大体のいきさつが解っていた。
小燕から西寧国際旅行に抗議が入ったのだろう。
やがて、車が停車した。そして、袁クンが言った。
「会社が空港までの送料は貰わなくていいと言ってるので１００元は先生に返します。あとの１００元は領収がなければ受け取れません。」と言う。よほど、きつく会社に叱られたのだろう。
可哀相に思った。でも、これでよかったのだ。騙しが成功したら彼らは又同じことを繰り返すに違いないから。いや、性懲りも無くつづけるかもしれないけど。
ぼくは名刺の裏に、しっかりと、袁クン宛で１００元は少ないでしょうが君の配慮に対しての、ぼくの気持ちです。と記した。
楽しい旅をありがとう。　大石・・・・・・・・・と。
袁クンはニッコリ笑ってその名刺をポケットに収めた。
空港で西安行きの飛行機を待っている時小燕からのメールが入った。

anata okane dosita kaesite morataka watasi si
npai siteruyo
６：１０発の西安行きＨＵ２０７機は、何と１５分も早く西寧空港を飛び立った。
乗客名簿を確かめての離陸なのだろうが遅れて飛び立つた経験はあったけど定刻より早くの出発（チューハー）は初めての体験だったので驚いた。
機内から見る外の景色は山また山の連続、まるで恐竜の背中が連なったようである。
背中と背中との間に溝があり、その溝の幅の広いところに、良く見ると土で盛ったような民家が見える。色が同じなので幾何学的な人造物を見逃すとわからない程である。いかにも原始的な建物に見えるが、これで案外、住んでいる人にとっては夏、涼しく、冬は暖かい快適住居なのかもしれない。
もう離陸して３０分も経とうとしているのに、延々と連なる恐竜の背中は続く。機内の窓が二重になっているので、その美しい背中を撮ることが出来ないのが残念である。
昨日の、あの広大な湖畔の大草原が見えないのが残念だがこれはこれでヘンピャオリアンである。
シャオチーが配られた。機内は一列３人掛けの小型機である。
ぼくの好物である大根の漬物が入っていた。この前は、いとも簡単に開けられた袋が今日はどうやっても切り口が見えない。メガネを取り出して探すがダメだった。勿体ないのでそっとバッグに入れた。
昨日、ツアーで出た青海湖の黄魚にはまいった。小骨の多さと肉の柔らかさは海魚を食べるぼくらには苦手である。そんなとき、こんな漬物があると助かるのである。

一時間少しで西安咸陽空港に着いた。
久し振りの西安である。西安といえば、友人の松間和尚の顔がすぐ浮かんでくる。始めて中国に来たとき北京の次に訪れた西安、そして、敦煌、ウルムチへの行き帰りに立寄った西安、いつも松間氏と一緒だった。
鹿児島に来ている陳兄弟のご両親にもお世話になったのはもう４年も前になる。そんな思いが空港に着いたら浮かんで来た。
もうひとり旅も大分慣れてきた。空港バスへの乗り方も手馴れたものである。ホテルはの位置は大体分っていたので服務員に東門の近いところか、鐘楼近辺で降ろしてもらうよう告げる。
●　ホテルに着いたら久し振りの西安の街で夕食に出かけること。
陳夫妻に到着を知らせること。●そのとき、明日の都合を聞くこと。
●華山一日遊の方法をホテルか陳夫妻に聞くこと。●帰りの長沙行の航空券の予約はどうするか?など、いろいろと済まさなければならない事がいっぱいある。ぼくはバスの中でノートにメモをとるのが忙しかった。
ぼくのことを心配している華天の小燕にも無事西安に着いたことをメールで知らさなければならない。彼女は、自分の建てたプログラムの上をぼくがなぞっているのを観察しているのかも知れない。
我が子のひとり旅を見守る母親の気持ちに似た感情が芽生えたのかも知れない。この前のメールはそんな感じに読めた。
月末の鳳凰行きは、ちょうど週末で勤務（工作）ゴンゾーがないのだと言う。
「ヨシチャン、一緒ニイコカ（一起去?）ワタシ　ホンファンは　イタコトナイノ　イキタイナ」と言っていた。
結局、シャトルバスは鐘楼の西側の角の?ホテル前で降りた。
「空港行のバスの始発もここです。行かれる先の予約をされませんか?」
と添乗の服務員が親切そうに言うので、ここで済ませた方がいいかな、早く、ひとつでも解決しておこうと、まあ、いわば渡りに船と言った感じで手続きを済ますことにした。
頼みついでに、携帯電話のチップの売場を聞いたところ、明日朝に連れて行ってくれる。と言う。えらく優しい小姐だった。まぁ、営業からみの親切だとは思うけど。
手机（携帯のこと）の調子が昨日から変なのだ。突然、不通になる。電波が届かない筈がない市街地なのに、といって電池は今朝充電したばかりだし、あとは銭切れかナ・・・・と思う。
ホテルはここから東大路を東に向かい、解放路の一つ手前の尚徳路を左折して・・・とその辺まではタクシーに告げられるけど、あとは運転手がホテルを知ってるかどうか?である。案の定、尚徳路に入ってからホテルが見つからない。
目指すホテルはなんと細い筋を入ったところにあった。ホテルの前はバスが5，6台、タクシーなら二桁は駐車出来るスペースがあるのだけど、そこへ行く道路が信じられないほどの細道なのである。こんなホテルも又、初めてだった。ホテルに着いた時はもうかなりの時間だった。晩御飯はどうしょう?
感じのいい服務員（ホテル小姐たち）だったので安心した。いつもフロントでの彼女たちのぶっきらぼうというか無表情の応対に頭にくることが多い。案内された部屋は思いのほか綺麗で広かった。
早速、陳さんに電話を掛けるが、なかなか通じない。フロントに電話すると番号

の回し方が西安は違うらしい。
電話でなかなか意思が通じ合わない。仕方が無いので諦めて電話を切った。すると、しばらくするとドアがノックされた。
開けると服務員がニコニコ笑顔で立っている。
「我教二打電話的方法・・・（かけ方を教えに来ました。）」と言う。
「アナタ　ニホンジン　ワタシ　ニホンニ　イッカ　イキタイ
ニホンノ　ハナシ　キキタイ　デス。」彼女は電話のかけ方を教えてくれた後でぼくに告げた。〈この間は中国語でのやりとりです〉

「いいですよ、何でも訊いてください。」
１時間後、二人で西安の街に食事に出かけた。仕事（フロント）の方は大丈夫なのだろうか？
鐘楼近くの餐館で軽い夕食をとりながら彼女との思いがけない愉しいひと時を持てた。小燕に怒られそうなので名前は書かない。でも、西安の街は何故か、たのしいアクシデントに見舞われる街である。
２４日朝：
陳ご夫妻と４年ぶりの再会である。
あの時は電話をする時も一方的に三つぐらいの文章を紙に書いた喋るだけだった。それでも、胸がどきどきして中国語にならなかったのを思い出す。それから較べたら今は少しはましかナ、と思う。

１０時ごろ、あの頃と変わらないお二人の姿が現れた。場所も同じホテルのロビーである。あまけに手に何かビニール袋をぶら下げているのも４年前と同じだった。
「お久し振りです。４年ぶりですね！お変わりありませんネ。今回はまたお世話になります。」
ぼくは、準備していた中国語を今度は、きっとうまく通じているだろう、と　確信をもって話した。
そして、長沙市長に差上げるつもりで買ってきていたモンブランの万年筆を陳さんに手渡した。

その日、一日の行程は
●携帯電話の店にお金を２００元入れる。
●中国銀行に行って１０００元引き出す。
●昨日予約した航空券を購入にいく。
●明日の華山行の一日遊の申込みをする。

・・・・・以上陳氏にお手伝いしてもらうことでした。午前中に用件を済ませた後、陳夫妻はぼくを餐館に案内してくれた。

・・・・美味しい！久しぶりに美味しい料理を食べた。
満洲料理店だった。
メニュー（菜単）は
○　糖酢鯉魚（松鼠魚）
○　玉彩拉皮
○　玉米餅
○　豆腐花
○　菊花里背
○　大学芋

西安二日目の夜〈２４日〉

夜は**大雁塔**（ダーエンター）の北側の門，慈恩寺の前の公園に巨大？とまではいかないけど、とてもすばらしい公園が出来上がった。
陳氏の話によると昨年の１０月に完成したばかり、と言う。
慈恩寺は、いうまでもなく有名な高僧、玄奘（６０２～６６４）がインドから戻

った後で寺の管理にあたった。そして、彼が持ち帰った大量の経典や仏像を納めるために**大雁塔**（ダーエンターを建設したものである。

現在、反対側の南門の方の大拡張工事が始まっている。

この門の前にある玄奘和尚の銅像の前では多くの観光客の記念撮影が絶えない。

夜、8時

ほとんど暗くなった公園の水辺には数百人の市民や観光客が噴泉の上がるのを待っている。

突然、水中が七色に変わったかと思うと音楽が鳴り始めた。

交響曲（クラシック）だったのにはびっくりした。てっきり中国の音楽と思っていたから。ラスベガスのベラージョホテルの前の踊る大噴水を思い出した。

一緒に観ている陳氏にそのときの感動を語ろうと思ったがとても中国語への翻訳が難しそうだったので断念した。

いつの日か、身振り手振りを混ぜて、自由に中国語を操れる日がくればいいなぁ、と思うことだった。

ここの噴泉公園は正式名称は**曲江**というのらしい。

幅が８０ｍぐらいで長さは３００ｍぐらいはありそうである。周囲はそこここに中国の歴史上の有名人（杜甫、李白といった詩人から他の文化人の銅像を中心にミニ庭園を囲ってある。）場所が１０ヶ所ぐらいある。

若者たちがその中の入って写真を撮っていたが、係りの人に注意されていた。

噴泉のプールは下に向かって 30 度ほどの勾配になっていて下からは噴泉が上がっていくように見える。上からは下がっていくように見えるのだろう。だから、どの位置に立って見るのがいいのか?

陳氏が掛かりの服務員に尋ねた。すると、そばにいた人たちも話しに加わってきて「そりゃ、下から観るのが最高よ!」すると、別な子連れの親子が「私達は真ん中付近で観ることにしてるの、だって左右にめが配られるから・・・・。」

誰だったかが言った。

「一番いいのは、まず、一番上にいて、それからゆっくり下に歩いてきたらどうだろう?」

「そうそう、それが最高かも。」ということになった。

ぼくたち３人はかくして、最上段に向かって、すこし小雨が降り出した石段を急いだ。

噴泉池は５段になっていて平面池の隣同士は数段の階段になっていた。

背景の大雁塔は幻想的にライトアップされ左右から二本のレーザーが走るさまは噴泉開始の数分前から、もうワクワクとした気分にさせてくれる。

北公園（曲江）の夜の大スペクタルショーは現在の中国の世界を視野に入れた観光事業のスケールの大きさを、まざまざと感じさせてくれるものだった。

西安４日目（26 日）

今夜 6 時半の海南航空機で長沙に戻る。

なんだか惜しい気がしないでもない。でも明後日から小燕と鳳凰に行かねばならない。

あと出来れば一週間ぐらいカシュガルから.カラクリ湖を回ってクチャとか新疆ウ

イグル自治区を旅したかったのだけど小馬の時間がとれなかったことと、ちょっと経済的なことも頭によぎり断念した。

昨夜、小燕から久しぶりにプライベートな電話が掛かってきた。旅行中、ほとんどは何かアクシデントがあった時しか直接電話では話しをしなかったのでベッドの中から話しをするのは久し振りだった。

話しの内容は要約すると「鳳凰は二日ツアーデス。ガイドが現地人で、アナタはコトバが多分通じないと思う。アタシが通訳しないとゼンゼン　オモシロク　アリマセーン。」とまあこんな話しだった。

さて、今日は独り行動である。西安市内で是非行ってみたいところがあった。いわゆる、**西門**と西大路にあるイスラム人居住地そして**清真大寺**である。

朝八時，少し身体がきつかったけど東大街の中ほどから西門まで歩いてみることにした。結局、一時間ほどかかって鐘楼まで来た。かなりばててきたのでタクシーを拾おうと思ったけど、此処から先こそ歩いた事がないところだった。好奇心が疲労に勝った。

西へ１００ｍから２００ｍ歩いた頃から頭に白い帽子を被った人たちが多くなった。イスラム系の人たちである。

道路も急にでこぼこが多くなってきた。開発、工事中なのか、右の一角は１００ｍぐらいの間口でビルの新築工事の最中であった。

やっと、西門に着いた。門の壁にでっかい赤の横断幕が貼ってあった。「もしや?」と悪い予感がした。

近づいてみると西門上の楼閣は木枠が組まれており、下にある切符販売所にも人影はない。折角、此処まで来たのに。

翌日、見送りに来てくださった陳氏に「昨日は西門を観に行きました。」と言ったら「今、工事中で登れませんでしたね。」と言われた。
そんなことなら、前の日に西門に登ってみたい。といえば早く分かっていたのに、と悔やまれた。

仕方ないのでタクシーを拾って清真大寺へ行くことにした。

タクシーの運ちゃんも余り場所がわからないらしくイスラム人街へ入ってしまった。運転手が場所が分からない事が幸いしてぼくはこのイスラム街の細いいくつもの筋を行ったりきたりぐるぐる廻り見学させてもらうことが出来た。

もうほとんど中国人、正式には漢民族は見ない、イスラム系中国人というのだろうか?女性は例の覆面?男性は白い帽子である。
朝の屋台がいっぱい軒を連ねる。朝は家では作らないのかもしれない。
とうとう運転手は
「ここで降りて観光客の後を付いていけば入口がみつかるよ」
と無責任な事を言ってクルマを止めた。

運転手の言ったとおり確かに欧亜人のツアー客がそこここにいっぱいいた。肩からＤＶムービーを提げ、半ズボンスタイルが彼らのトレードマークのようだ。ほとんどが中年、どこの国もコレは変わらない。
清真大寺は本当に分かりにくいところにあった。

幅２ｍぐらいのみやげ物屋が並ぶその一軒分の左に入口があった。そこだけ、ひときわ人だかりがしているので分かったぐらいで、もし誰もいなかったら通りすぎしかねない。

入口で２元を払って団体客の間をぬって先に入った。
西寧の**清真寺**とはちがって、こちらの方がずっと歴史を感じさせる建物だった。
面積は狭かったけど庭園風のイスラム寺院と道教風の院とを融合させたような感じがした。
あちこち写真をとって３０分ほどで**清真大寺をでた。**
出口から左右にみやげ物屋が１００軒くらいずらりと並んでいる。
歩いてみると、もう全く同じものばかりをどの店も並べている。
今までと違うのは客引きや呼び込みがほとんど無い。
手にとっても控えめにしか反応しないのがよい。
ある店で陶器の箸を手にとって「多少？」と訊いてみたところ、
「１５元！」と女主人が言うので、そのまま歩きかけると突然
「いくらなら買うか？」
とこれまたなかなかのアクセントの日本語で声がかかった。
ひとりで歩いているぼくに日本語でといかけるとは、？？？。
「５クァイ、イーガ。」（五元でどうか？）と言うと「くあぃー」（いいよ）と言う。
ところで、何で日本人てわかったの？と聞くとニヤニヤして答えがない。ぼくが日本語で訊いたからだろう。
「モットいいものが奥にある。観るだけでいいからどうか？」
と太った女主人は言う。
奥のせまい室には棚いっぱいに清朝のころのものばかりだというめずらしい骨董品の山がおかれていた。
むろんそのひとつひとつが売り物で、売る気なのだろうから彼女の説明は熱がこもっていてよく分かる。
博物館の陳列品の説明をするガイド嬢よりはるかに興味をそそる説明だった。
「先生！これは清の＊＊皇帝の本物の落款（印章）です。」ともったいぶって刻印をとりだした。確かに４センチ四方のかなり立派な印款だ。４００元でいいと言う。
骨董趣味がないので値引きもしないで他の品に目を移したが交渉したら半値以下にはなるのだろう。
清朝の頃のアンティークな布製の人形の数々にはなぜだか触手が伸びた。
いかにも古い感じで、なんともいいようもなく、いいのである。１つ、３００元だと言う。話しているうちに１５０元まで割り引くという。
ぼくの関心がわかるのだろう。
「一個、５０元でどうか？」と言うと「１００元ならいい。」と言う。
一瞬、店のお客さんの児玉基子さんのご主人の顔が浮かんだ。
「好きそうだなぁ」と思ったが、不思議なもので、長く交渉しているとその品に対する欲望が段々としぼんでくる。
「二個１００元では？」というところで、とうとう交渉は成立しなかった
ちょうどその時店先にアメリカ人の団体が入って来た。
「ちょっと待ってて。」と言って彼女はアメリカ人相手に今度はカタコトの英語で商売を始めた。
長引くようだったのでぼくは店を出ることにした。

あわてたかの女主人は

「また来てネ。」と紙切れに自分の店の番号を書いて渡した。　《２

１３房》と書いてあった。

・・・。チョッと悔いの残るアンティーク人形だった。

次は華山に挑戦します。華山が中国有名聖山五岳の一つだと、当時知る由も無かった。

でも何故か気になっている山ではあった。

山といえば黄山とか武陵源(張家界)や峨眉山がすぐ目に浮かぶ。

では、なぜ華山かというと、知人の留学生の陳姉弟を高千穂登山に連れて行った際、弟の豪クンが

「中国には華山という山があって、そこはここよりずっと険しい、すごい山です」

と言ってたこと、同じく鹿児島大学留学生の白銀平さんのエッセイを日本文に翻訳した時も、その中に華山の素晴らしさを紹介してあったことなどで華山がぼくの頭のなかで、ある種の存在を占める山になっていたのである。

ぼくはいつの日か、この山を自分の足で必ず踏みしめるんだ、という、確信みたいなものを持っていた。

だから華山の姿を初めて見た時の出会いの挨拶は「初次見面」ではなく「好久不見(久しぶりですネ)」だった。

ぼくはどちらかと言うと山登りが好きな方ではない。山は好きだけど、登るときのきつさが嫌なのだ。登りはじめて１０分もするといつも

「アァ,来るんじゃなかった。」

と後悔する。それなのに登りたいと思う。最近は体力や気力より、体が言うことを利かなくなったら・・・と思うと無理してでも登れるうちに、なんて思うこの頃である。

ところで、　生涯にぼくの登りたい山、すなわちぼくの五岳を挙げるとすると、次の山である。

富士山・屋久島の宮之浦岳・中国の黄山・西安の華山・麗江の玉龍雪山実は、すでに前の三つは登ってしまった。

今回の華山を踏破すると、後残るは玉龍雪山だけということになる。玉龍雪山は４年前、麗江に行った時、かの山を遠くに眺めながら、ツアー旅行だった為に果たせず、頂きの白い雪を眺めつつ別れてきた思いがある。

《華山一日遊》の費用は２６０元ということだった。ほとんどがバス代と入山料だとすれば高いのか安いのかわからない。こちらの旅行社の例の寄せ集め団体ツアーである。

朝８：００の集合から帰りは６：００ごろと言われた。ガイドから８時にぼくの携帯に電話がかかった。本当に、中国手机は役に立つしろものだ。

「グォ　来了！」(モウ　ホテルに着きましたよ。)という電話だった。また、慌てさす。結局、ぼくの前に乗っていたのは４人で、なんと、バス（班車）を４回も乗り換えて、最終的には１２名ほどのグループでバスは華山に向けて出発した。

ガイドもその間、３名ほど変わり、今のガイドが本当のガイドなのだろうか。といことは、ぼくが日本人だということは多分わかっていないのかもしれない。まあ、別にどうということもあるまい。

ぼくはもう、あまり考えない事にしていた。一緒に行動しているうちに分かることだろう。

一行が売店で軍手を買っていた。それと、何か?赤いひもを買っている人がいた。

ちょうどいいチャンスだと思い一行の中の、若い一組の女子大学生らしき小姐たちに訊いた。

「ぼくは日本人の旅行者です。ひとりで旅をしています。」

と自己紹介をしてから、

「　ところで皆さん手袋を買ったようですが必要なんですか?」

「それと、　その赤いひもはゼンモヤン（なんでしょうか?」

・・・・・と。

彼女らは江西省.吉安から来た女子大生だと言った。返事はいつも英語だった。

「手袋は坂が急なので手をつく機会が多いからつけた方がいい」　、とガイドの説明があったそうだ。

もう一つの赤いひもについては縁起物らしいこと以外は、彼女らの説明にぼくの語学能力がついていけなかった。

結局、このほかに二組の熟年夫婦、一組は北京人、一組は四川人の7人が索道（ロープウェイ）で北峰（雲台峰）１６１４ｍまで上がってそれから西峯、南峰と廻るコースを辿るメンバーということになった。

要するに、ぼくはヨン　スダオ（ロープウェイを使って登る組）というキーワードに飛びついただけのことで、もう何度もこの言葉だけは張家界でも、鄭州でも、蘭州でも、どこでも聞きなれた言葉だったのである。

余談だけど、ここのロープウエィの料金も５０元と高かった。他の人たちはそんなに出していないようで、なにやら騙されたような気がしていたらガイドがご親切にぼくに言った。

「アナタのだけは往復切符ですからこのカードはだいじになくさないでください。」

ところで、ここでぼくの感じた崋山の印象を書いて見たい。

崋山は今までにぼくが抱いていた中国の山とは違っていた。

今まで見てきた山、又は登った山はとても好看（ハオカン！）つまり、眺めることで感動した山がほとんどだった。

黄山を筆頭に張家界、峨眉山、九寨溝・黄竜、衡山、しかりである。キーワードは奇岩と松と絶壁である。

ところが、この崋山の他の山との最大の違いは、この山はいわゆる訓読みでよむ「いわやま」ではない。音読みで読む「ガン山」とでも言おうか。「いわ壁」ではなく、崋山の岩はまさに「ガンペキ」なのである。

山全体が一枚壁・・・・・・・・・・・・・・。

「中国超級旅遊術」第三書店・を書いた河合宣雄氏によれば

・・・・「そもそも崋山は、大昔には地下に埋もれていた岩石です。

それが約８０００万年前の地殻変動で隆起し、反対に渭河地帯が陥没して、現在のように海抜２２００ｍの山になったのです。

崋山の登山路は一本だけで、山頂部分でのみグルリと一周できる回遊路になっています。・・・・・・

索道（四人乗り）もかなりの急勾配である。ロープウェイに乗って

「チョッと、怖いな」と感じたのはいままでで初めての経験だった。

登山道は幅1メートルぐらいの急勾配ではあるが,感心するぐらい綺麗に階段を彫って出来ていた。

崖側や岩肌の側にもしっかりした鎖が張り巡らされてあり、よほど高所恐怖症でない限り、下を覗き込まなければ、歩いている分には遠くで眺めるほどは怖くはなかった。

あの赤いひもは大部分はこの鎖に結ばれていたけど、崖の外に生えている樹木の枝、それは、あんなところに一体、どうやって付けたのか？《》と考えられない位置、**絶対に崖から落ちてしまう位置**に付いているのには驚いた。

時間と共に仲良くなってきた、**にわかグループ**の皆と、登ったり,下ったり、途中の寺院（**がある**）で休憩したり、岩の間の休憩処で休んだり、「声を掛け合ったり」「冗談で笑いこけたり」、手を差し伸べて、引っ張り合ったり、時には、下からお尻を持ち上げあったり、・・・・と、

名前も呼び合わない（中国にわかツアーに名前はほとんど不用）同士が本当の仲間同士になって行動すること3時間余り。

数時間後には別れ別れで、おそらく一生逢う事もない人たち同士の一期一会である。

旅のたのしさを感じるひと時だった。

もし、独り行動だったら果たして3っの峯の頂上に立つ事が出来ただろうか?おそらく無理だったに違いない。ただ、残念だったのはあの名高い空中桟道をちょっと見てみたい、という夢は果たせなかったけれど。

ぼくは蓮華峰に立ったときフト日本にいる留学生、白銀平さんの顔が浮かんだ。

「そうだ、ここから電話をして、驚かせてやろう」

手机をポケットからとり出し何度か送信を試みた。でも、日本へは残念ながら繋がらなかった。

まさに　《山登りを満喫した》そんな崋山一日遊だった。

華山から西安に戻ったのは予定の時間をはるかに越えた夜の10時すぎだった。

5：30に華山からの帰りのバスが出たからここまで4時間30分かかっていることになる。

実は二ヶ所ほど寄り道をしたのである。

一箇所はこの手のツアーには付きものの買い物停車である。・・

・・・・　椅子が並んだ個室に一行が案内され、白衣を着た若者の薬剤師もどきが講演というか説明がが始まる。

手にはひからびた茸みたいなものを2.3個持っている。、

いつでも、どこでもある販売パターンである。

10分ほどの説明のあと大きな売場に導かれる。

ぼくは　「ティンブドン!」（言葉がワカリマセーン!）と言って外に出た。

大体、同じような行動をする人が何人かいるが他のメンバーは結構中を徘徊して売り子の説明を聞いている。

その割には買い物をしてくる人は余りいない。中国人は人の話を聞くのが好きな民族なのか?それとも、従順なだけなのだろうか?

このあと、絶対見逃せない場所だから、みなさん是非観て行って下さい。とガイドが薦める《西岳寺》に立ち寄った。

結局、此処に1時間ほどいたことになる。

写真も沢山撮ったけれどこのページに収めることが出来ないので写真だけ別の写真集に貼り付けます。

見たい方はここ《西岳寺》をクリックしてください。

このあとは西安編の後の方が26日（水）の行動になっている。

又もとの短いローマ字のメールだった。

ぼくの返信文は中国語で**「謝謝我愛小燕」**六文字だった。